

台風第6号に伴う中国の気象状況について

本年の台風第6号は宮古島附近を北西進し8月2日朝浙江省象山港附近に上陸し、中国に多大の被害を与えた。なお、気象庁予報課ではこの台風の中国本土上陸時の勢力を次のように推定していた。中心気圧は925mb、中心附近の最大風速は60m/sである。8月5日付人民日報には中央気象科学研究所の発表として各地の最大風力及び雨量並びに過去の記録との比較が報ぜられているので、参考に次に示す。

各地の最大風力		各地雨量	
上海	34m/s	海門	141mm
舟山島	40〃	天目山	248〃

「大後美保 ことわざの真実」

—天気、災害、豊凶のことわざから—
 新書版 213頁 110円
 発行所 三省堂

天気に関することわざは、短期予報においても季節予報においてもかなり重要な位置を占めている。これらのことわざのうちには、いかげんなあてにならないものも少なくないが、科学的に検討して利用できるものもたくさんある。われわれが一般の人から受ける質問のうちにも、ことわざに関するものがかなりあるが、これについての参考書となるとあまり適当なもののみあたらなかった。

今までにも天気に関することわざを集めたものは二三刊行されているが、本書は単なることわざ集、すなわちことわざを収集して分類し、それがどんな内容を現わしているかを説明しただけのものではなく、これらのことわざがどの程度に役に立つものであるかを解説した点の特徴でありそれだけになかなか参考になる点が多い。この本は三省堂百科シリーズの一冊であって、一般社会人

渡辺和夫氏からの便り (17, Nov. 1956)

テキサスの田舎町(カレッジ・ステーション)に着いてからもうじき1カ月になり、こちらの生活にもやや慣れて来ました。

この Texas Agricultural and Mechanical College は1878年頃に出来たそうですが、その Department of Oceanography & Meteorology というのは未だ非常に新しいようです。

この気象海洋部は軍その他からの依頼研究計画を沢山持っているので、職員も多く、男女含めて150名近くおり、研究も非常に活潑にやっています。

気象のsectionでは日本でも Principle of Meteorological analysisの本でなじみの Saucier をはじめ20人ほどの人が(その一人が佐々木氏)、trajectory と jet の研究をしています。trajectory は日本から飛ばした気球の航跡資料を使って300mb附近の渦度や発散量を求め、天気図と比較したりいろいろ研究し、jet は空軍の

		最大風力	雨量	
海州	35〃	黄山	318〃	
安慶	40〃	蕪湖	129〃	
南京	26〃	蚌埠	105〃	
常德	24〃	開封	118〃	
九江	24〃	北京	127〃	
塘沽	23〃	保定	144〃	

また今度の台風の暴風雨範囲は10省に及び、50年来稀な台風で、例えば1915年(大正4年)7月下旬上海附近台を通った台風では最大風力38m/s また1949年7月下旬上海附近通過の台風(注—7月25日上海西方を通った風 Gloria)では最大風力36m/sで今回の方がはるかにい。(田辺三郎)

の教養を目標としており、高校生や中学の上級生にも理解できる書きかたである。ことわざという性質上動植物の名など常用漢字以外の漢字がかなり使われている。これらにはふりがなが付けてはあるが、動植物名はかな書という原則にしたがってほしかった。また蓋然誤差というような古い術語も改版の時には改めていただきたい。

第1章「使い方で役立つことわざ」はいわば総論であるが、ことわざの来歴とわれわれがことわざを利用する場合の注意と述べてある。第2章は「天候と天気予想」についての章であるが、この章の初めに記してある天気に関することわざの歴史、すなわち占いの時代から日より定め(Key Day またはControl Day)の思想を経て、天候暦が出現し、ついに観天望気の時代に入る変遷は特におもしろい。さらに「災害の予想」「豊凶の予想」の章をもうけて、各章ともに日本各地のことわざを多数収集し、これを分類整理したうえで、信頼できるものと信頼すべきでないものとのわけ、信頼できるものについては統計的裏付のほかに、気象学的あるいは生物学的な検討を加えている。(日下部正雄)

特別観測の資料を使って解析研究しているようです。これにはこの学校にあるIBMの電子計算機もいろいろ使われています。radar 気象の section では Ligda のもとに17人ほどの人が働いており、各地の空軍基地でとられたレーダーの映写フィルムを集めて広域の radar echo の composite photograph を作り、それを使って一般予報技術の研究やトルネードの研究、洪水予報の研究などを行っています。

また micro 気象の section では analogu-computer の原理を応用して、摩擦層内の摩擦係数を9層にわけて与え、それに地衝風の vector を与えた時、各9層内に起る風の vector をブラウン管で示し、傾度風の vector が急に変わった時に摩擦層内の風はどのような慣性運動をするか調べたり、また、太陽高度・雲量・水蒸気分布などを与えて地表の輻射量の日変化を自記させたり、地中温度の変化を自記させたりして研究しています。(後略)(高橋浩一郎氏宛の手紙である)